

平成 30 年 4 月 6 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02289

研究課題名(和文) 初期近代イギリス演劇における舞台のカーテンの使用方法に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Use of Curtains in the Early Modern English Theatre

研究代表者

市川 真理子 (ICHIKAWA, Mariko)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：80142785

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：シェイクスピア劇等が上演された初期近代のロンドンの劇場では、各シーンの場所の設定を示す書割は使われなかった。そのため、舞台背後の中央開口部に掛けられたカーテンの存在感は極めて大きかったはずである。本研究では、現存する劇テキストを演劇空間論的観点から調査することにより、当時の劇団はどのような色や模様や種類のカーテンを所有していたか、それは悲劇や喜劇の上演においてどのような効果を果たしたか、また、上演の途中での付け替えなどを含め、どのような方法で使用されたのか、等の問題について重要な結論を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study dealt mainly with the question of how stage curtains were used in early performances of Shakespearean and contemporary plays. The early modern stage was almost bare. The curtains in front of the discovery space would therefore have contributed to the mood and atmosphere of scenes. Through examining early printed play texts and theatrical manuscripts, I have been able to find useful pieces of evidence which support several important conclusions, including the following three. (1) The early modern playing companies had the custom of using black hangings for tragedies, and they chiefly used curtains portraying scenes from biblical, classical and mythological stories for comedies and non-tragic plays. (2) When there were shifts of tone in the play, the stage curtains were changed so as to reinforce the changed atmosphere. (3) Location changes of a certain pattern would also have involved the changing of curtains.

研究分野：イギリス・ルネサンス劇のオリジナル・スタイジング

キーワード：劇場 舞台 カーテン スタイジング

1. 研究開始当初の背景

国内国外ともに、初期近代イギリス劇の研究者の大方は文学批評や文化研究等に携わり、様々な成果を挙げている。そうした研究を直接的ないしは間接的に支える基礎学問の中に、シェイクスピア時代の劇場研究や上演研究がある。

本研究の研究代表者(市川真理子)も長年、劇テキストを当時の劇場構造や上演との関係において扱うことに従事し続けてきた。そうした研究の中で、とりわけ、舞台背後の左右のドアや中央開口部の使用方法に関する考察を行いながら、中央開口部を覆うカーテンが、いわゆる「発見」や「立ち聞き」ないしは「覗き見」のシーン (discovery scenes; observation scenes) などのアクションのために必要だったばかりではなく、シーンの雰囲気や場所の設定の伝達のためにも重要な機能を果たしていたのではないかと思われる例に突き当たることが少なからずあった。例えば、シェイクスピアの劇団が上演した *A Warning for Fair Women* には、悲劇の上演における黒い掛け布の使用についての言及がある。すなわち、“The stage is hung with black: and I perceive / The Auditors prepared for Tragedy” (Q1, A3r)。この台詞の解釈には諸説あるが、いずれにせよ、シェイクスピア時代の悲劇に関する諸研究において、この習慣はほとんど意識されていない、というのが実情である。喜劇の上演に関する習慣も含めて、この時代の舞台のカーテンの使用法に関する総合的な研究が必要であると実感した。

舞台のカーテンの存在や使用法は当時の演劇の習慣だったために、劇テキストの中で一々詳細な指示はされていない。しかし、断片的ながら有益な情報が劇テキスト自体の中にもまだ見つけられないまま残っていて、それらの情報を当時の演劇空間というコンテキストの中で綿密に分析すれば、新たな知見が得られるはずであると信じて、本研究を開始した。

2. 研究の目的

シェイクスピア劇などが上演された初期近代のロンドンの劇場では、各シーンの場所の設定を示す書割 (scenery) は使われなかった。そのため、舞台背後の中央開口部(いわゆる“discovery space”)に掛けられたカーテン (stage curtains) の存在感は極めて大きかったはずである。舞台のカーテンがアクション自体に直接使用されない場合でも、劇全体や各シーンの雰囲気は何らかの影響を与えただろう。時には場所の設定の伝達にも貢献していたことを示唆する例もある。本研究は、現存する劇テキストを演劇空間論的観点から調査することにより、劇作家や俳優たちが執筆や演技の前提としていた舞台のカーテンの使用法に関する習慣を再構築することを目的として掲げた。

具体的には、次の4つの問題について、一

定の結論を得ることである。

- (1) 劇場で使用されたカーテンの種類(色や模様に関して)
- (2) 悲劇の上演に関する習慣(上演の間ずっと黒いカーテンが使われたのか否か、等)
- (3) 喜劇やその他のジャンルの劇の上演における習慣
- (4) 場所の設定 (locality) やシーンの雰囲気とカーテンとの関係(特に、当時の劇に頻繁に見られるシーン設定とカーテンの種類との関係)

3. 研究の方法

本研究は、大別して、次の三つの営為から構成された。

- (1) 劇テキストの調査・分析によるデータ収集
- (2) 関連する諸研究の調査および研究
- (3) 論考の作成および理論の構築

それぞれについて順に述べる。

(1) まず、データの収集であるが、劇テキストを一つ一つ調査して、中央開口部が何らかの形で使われるシーンや、カーテン等に言及するト書き、台詞、書き込みなどを収集し、カーテンの種類や使用法について分類した。国内では、Early English Books Online (EEBO) 等、ファクシミリ・テキストを有効に利用したり、*Literature Online* 等の電子テキストを使うことで、データ収集の効率化を図ることも行った。しかし、ファクシミリの印刷状態は決して満足のいくものではないし、また、同じエディションでもいくつかの印刷状態 (state) がある場合がある。さらに、当時の上演を反映する書き込みのある印刷本は非常に有益である。そうした認識に基づき、可能な限り、直接オリジナル・テキストを、しかも可能な場合は複数のテキストを調査することを旨とした。ブリティッシュ・ライブラリー、フォルジャー・シェイクスピア・ライブラリー等で初期版やマニユスクリプトを調査し、とりわけ、当時の劇団の book-keeper による書き込みのある上演台本からは極めて有益な情報を得た。

(2) データを有効に分析し議論を深めていくために、関連諸分野の調査および研究を行った。当時の劇場や劇団に関する研究や、劇テキストの出版や印刷に関する研究など、初期近代イギリス演劇に関する諸研究は当然ながら、カーテンの使用には文化的側面があるので、美術史や宗教史なども視野に入れた調査および研究を行った。またルネサンス期の手法のうち、あるものは中世演劇やローマ古典劇などの手法が発展したものであることが予測されたので、こうした劇も調査するとともに、イギリス演劇全般にわたる研究書も広く、新旧を問わず、対象とした。

(3) 収集したデータを分析することによって得た具体的な問題点を整理し、それらを扱った論文を執筆しながら、研究の軌道を修正したり、発展させたりするよう努めた。とりわけ、*Theatre Notebook* 等の国際雑誌に投稿したりすることで、オリジナル・ステイジングや関連諸分野の研究者たちのレビューを得ることができるよう心掛けた。

4. 研究成果

上の「2. 研究の目的」に記した4つの問題に関して、研究の結果、到達した結論や確認された点に関して、記述する。

(1) まず、劇場で使用されたカーテンの種類であるが、おそらく大方の劇団が悲劇のための黒いカーテンに加えて、ギリシア・ローマの神話、古典文学、聖書などにおいて語られている有名なシーンを描いたカーテンを所有していた。例えば、John Day, *Law Tricks* で使用されたであろう“Venus and Adonis”を描いたカーテン、Thomas Middleton, *A Mad World, My Masters* で使用されたであろう“the Prodigal Son”を描いたもの、そして、Francis Beaumont, *The Knight of the Burning Pestle* で使用されたであろう“the rape of Lucrece”を描いたカーテン、などである。(これらの例はすべて屋内劇場で上演された喜劇の中で言及されたものであるが、屋外劇場でも、たぶん質は悪かったかもしれないが、類似のデザインのカーテンが使用されたと考えてよいだろう。) さらに、Bruce Smith の研究などによれば、緑色のものや、草花や樹木を描いたカーテンなどが使用されることもあっただろう。

(2) 悲劇の上演に関する習慣に関しては、必ずしも上演を通して、ずっと同じ黒いカーテンが掛けられていたわけではなく、劇の筋の展開に応じて、最初と最後だけ黒いカーテンを使用したり、劇の後半のみ使用したりということもあったようである。例えば、Christopher Marlowe, *Doctor Faustus* では、第1幕、第2幕、第5幕で黒いカーテンを使用し、中間の第3幕と第4幕では、そこでのコミックアクションに見合うカーテンが使われたと考えられる。また、Thomas Heywood, *The Rape of Lucrece* には、劇の後半で初めて黒いカーテンが使われたことを示唆する台詞がある。これらの悲劇が初演された当時、屋外劇場ではまだ幕間のインターヴァルは採用されていなかったが、必要に応じて上演の最中にカーテンが付け替えられたのである。

(3) 喜劇や悲喜劇などでは、上述のような神話、古典文学、聖書などの有名なシーンが描かれたカーテンが主に使われたであろう。しかし、悲劇の場合と同様に、常に、上演を通してずっと同じカーテンが使用されたわ

けではないことは、Philip Massinger, *The City Madam* の第一・四つ折り本テキスト(1632)に偶々印刷された book-keeper の指示から明らかである。すなわち、“*Whil'st the Act Plays, the Foot-step, little Table, and Arras hung up for the Musicians*” (Q1, K1r)。Frederic Kiefer が述べるように、劇中で演じられるショーの内容に見合う図柄が描かれたカーテンに替えられたのであろう。ショーが演じられるのは第5幕第3場であるが、この指示から明らかなように、カーテンの付け替えは、第4幕と第5幕との間のインターヴァルで行われた。

(4) カーテンの付け替えの問題と関連して、当時の劇には極めて頻繁に見られるシーン設定が存在したことに注目したい。具体的には、例えば、「森」や「藪」、「庭園」などのシーン設定であるが、これらのシーンにおいては、特定の種類ないしは色のカーテンが使用されたかもしれない。Shakespeare and John Fletcher, *The Two Noble Kinsmen* では、第3幕の出来事はすべてアテネ近郊の森の中で起こる。“*Enter Palamon as out of a Bush, with his Shackles*” (Q1, F2v); “*Enter Palamon from the Bush*” (G4r) というト書きは舞台上に大道具 (property) の灌木が運び込まれたことを示唆しているという見解が有力となっているが、あるいは、第3幕では、第1幕と第2幕で掛かっていた神話や聖書などのシーンが描かれたカーテンに代わって、緑色、または草木などが描かれたカーテンが使用された可能性があるのではないかと。

このように、シーンの場所の設定に関しては、しばしば、大道具が運び込まれたのか、それとも中央開口部のカーテンが使用されたのか、ということが問題となる。私見では、多くの場合、カーテンの使用で十分間に合ったのではないかと思われる。逆に言えば、これらのシーンは、中央開口部に掛けられたカーテンの存在を前提に書かれているようにも思われる。そうした例の一つとして、Ben Jonson, *Bartholomew Fair* における Ursula のブースと、Leatherhead の人形劇の芝居小屋の問題がある。宮廷における上演と同様に、ホープ座における初演においても、大道具のブースが使用されたという説が一般的であるが、市川は、劇テキストの分析から、ジョンソンは、ホープ座における初演では中央開口部のカーテンが使用されることを期待していたのではないかと考える。

最後に、本研究の成果を今後どのように発展させるべきか、ということについて述べると、研究期間を通して、頻繁に実感したのは、カーテンの使用方法の問題は、多く場合、左右のドアの使用方法の問題と緊密に関連する、ということであった。本研究で扱わなかった問題も含めて、ドアとカーテンに関する諸問

題を、舞台背後の楽屋正面壁の構造と使用方法の問題として、総合的に考察することは、上記の各結論にさらなる説得力を持たせるためにも、必要不可欠である。

< 参考文献 >

- Kiefer, Frederic. "Curtains on the Shakespearean Stage". *Medieval and Renaissance Drama in England*, 20 (2007): 151-86.
Smith, Bruce R. *The Key of Green: Passion and Perception in Renaissance Culture*. Chicago: University of Chicago Press, 2009.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

- (1) Mariko Ichikawa, "Were Property Booths Used in the First Performance of Jonson's *Bartholomew Fair*?", *Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre*, 71 (2017), 72-93. 査読有。
(2) Mariko Ichikawa, "What Story Is That Painted upon the Cloth?": Some Descriptions of Hangings and their Use on the Early Modern Stage", *Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre*, 70 (2016), 2-31. 査読有。

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 1 件)

- (1) Mariko Ichikawa and others, Cambridge University Press, *The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare*, ed. by Bruce R. Smith, 2016, Vol. 1, 128-134. 査読有。

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://db.tohoku.ac.jp/whois/detail/51a93bdf77d975c55322253418f5bb2b.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者
市川 真理子 (ICHIKAWA, Mariko)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80142785

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
()